

今年1月に上映されたマーティン・スコセッチ監督の映画『沈黙―サイレンス―』を観に行った。『沈黙』は、1966年に遠藤周作が江戸時代初期のキリシタン弾圧の時代を描いた歴史小説。現在、作品が翻訳されている国は20カ国以上にも及ぶ。そんな不朽の名作が、ハリウッドで映画化され、国内外で話題を呼んだ。

映画では、江戸幕府がキリスト教を根絶するために、数多くの信者を処刑していくシーンが続く。目を伏せたくなる事実だが、どんな厳しい弾圧にも耐え忍ぶ人々とその姿を見守るすべしかなく悩む宣教師の姿を見て「宗教と信仰」について改めて考えさせられた。

そして間もなく耳にしたのが、天草の崎津集落や国内最古の教会である長崎の大浦天主堂など12の資産から構成される「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界文化遺産への推薦書がユネスコに提出されたニュース。キリスト教の伝来・布教の後、禁教政策による弾圧、潜伏信仰の伝承といった歴史と文化が、世界的に評価されたという理由について納得ができた。

このエリアに興味を湧いて調べたところ、天草には九州本土と天草諸島を結ぶ天草五橋という人気観光スポットがあることを発見！今回は、自然と調和する橋の風景を楽しみながら、潜伏キリシタンの歴史や文化に触れる旅に出ようと思いついた。

歴史が息づく島

天草へ

天草五橋を渡り、潜伏キリシタンの歴史と文化に触れる



島民の二円献金運動が 計画を後押しし、構想から 30年をかけた天草五橋が完成

JR熊本駅から電車で約50分、三角線の三角駅から旅をスタートした。2011年に特急「A列車で行こう」のデザイナーにより南蛮風のデザインにリニューアルされた駅は、レトロモダンな落ち着いた空間が広がる。ディテールの一つひとつが凝っていて、思わず手で触れてみたくなった。

まずは駅からすぐの天草五橋へと向かう。九州本土の三角から大矢野島・永浦島・大池島・前島を経て天草上島までを繋ぐ5つの橋は、森慈秀氏が県議会議員として昭和11年に提言してから30年もの年月を経た1966年9月に開通した。離島で交通の便が悪いハンディキャップを解消したいという意見に対し、「技術的に夢物語だ」と誰からも相手にされなかつ

たという。実現のきっかけは、1955年から取り組んだ「二円献金運動」。島民から一人1円の献金を募り、25万枚の1円札を当時の建設省に届けたエピソードが残っている。

熊本市から天草市本渡間は、鉄道と船を乗り継いで4〜5時間かかり、海が荒れると交通が途絶え島から出られなかったが、開通後には車で約2時間20分と大幅に短縮。交通量は開通後10年近くで4倍に急増し、天草への観光客の増加につながった。当初、有料道路として30年で償還する予定だったが、完成後わずか10年で無料開放。地元のみならず待ち望んでいた橋だということがよくわかる。

現在、熊本県では熊本市と県内主要都市を90分で結ぶ「90分構想」を掲げ、熊本市と天草市本渡町間の約70キロを繋ぐ「熊本天草幹線道路」を計画しているそうだ。



▲ 三角駅：JR三角線の終着駅である三角駅は、天草へと向かう三角港に接続する路線として明治32（1899）年に設置された歴史ある駅。土日祝に熊本駅—三角駅間を運行する特急「A列車で行こう」のデザインに合わせて外装と内装を一新した。



▲ 森慈秀像：2号橋の近くには、天草五橋の建設に尽力した森慈秀氏の銅像と天草五橋のミニチュアが造られている。



▲ 3号橋（中の橋）：スパン中央にヒンジを有するラーメン橋。全長361メートル。スパン160メートルは世界第2位（開通当時）。



▲ 5号橋(松島橋):パイプアーチ・合成桁橋。全長177.7メートル。本格的パイプアーチとしては日本初(開通当時)。



▲ 2号橋(大矢野橋):ランガートラス・合成桁橋。全長249.1メートル、ランガートラス156メートルは日本第1位(開通当時)。



▲ 1号橋(天門橋):連続トラス橋は全長502メートル、中央径間300メートル。連続トラスとしては世界第1位(開通当時)。海面からの高さは42メートルで大型船も航行できるようになっている。

多彩なデザインの天草五橋は、自然の中にある橋の博物館

天草への玄関口、九州本土と大矢野島を結ぶ1号橋(天門橋)が見えてきた。ここから5号橋(松島橋)までの30分間は、橋の特徴をチェックしながら景色を楽しみたい。

1号橋(天門橋)は、トラス橋と言われる構造。三角形は力を加えても変形しにくいというトラスの原理に基づき、三角形を組み合わせて、より丈夫な橋を完成させた。シンプルでスマートな美しさが目を引く。

虹のように弧を描いたクリーム色の橋は2号橋(大矢野橋)。このアーチ構造は、アーチ部材にはたらく圧縮力で橋を支える安定構造だと古くから知られている。昭和の情景を思い出させるような形状と色合いが何とも愛らしい。

3号橋(中の橋)は、主桁と橋脚が一体化したPCラーメン構造。特に耐震性に優れ、高速道路などによく見かける。4号橋(前島橋)も同じラーメン構造で天草五橋の中で最長の約510メートル。道路の高さを低くして景色を楽しめるように設計された橋の上では、窓ガラスを開けて潮風を浴び、島々が浮かぶ景色を間近に感じながら爽快に走る。

最後は、国内でも例が少ないパイ



▼ 4号橋(前島橋):天草五橋の中で最長の長さを誇る全長510.2メートル。PCラーメン形式。スパン中央にヒンジを有するラーメン橋でスパン146メートルは世界第4位(開通当時)。



▲ 天草大王(写真右):熊本県内でのみ飼育生産されている地鶏。昭和初期に絶滅したが、雌雄の姿を描いた1枚の油絵とわずかな文献を基に熊本県農業研究センターが復元に成功した。

▼ 天草ちゃんぽん

上天草市の「ちゃんぽん大王」では、日本最大級の地鶏と言われる天草大王でスープのだしを取り、ミンチ肉と車エビをトッピング。



プアーチ形式の5号橋(松島橋)。橋の鮮やかな赤、山々の緑、青い海のコントラストが際立つ。ずっと見ていたら子どもの頃に遊んだ公園の遊具を思い出して懐かしくなった。橋の博物館巡りのような楽しいドライブの余韻が残るなか、「ちゃんぽん大王」の看板を見つけ、お腹が減っていたことに気づく。幻の地鶏・天草大王と車エビを使った一杯をスープまでしっかりと味わった。

▼倉江大橋:倉江川に架けられた松島有料道路の橋のひとつ。PC3径間連続ラーメン箱桁橋。小判型の橋脚など丸みのあるデザインが特徴。全長200メートル。

▼知十橋:完成したばかりの知十橋は、50年以上経って老朽化が進み架け替えたPC橋。

マリア像と教会がキリシタンの信仰の深さを物語る崎津集落

昼食を取り終えた午後。2つのPC橋が平行に架かる貴重なスポットがあると聞き、国道324号線を通って現地に向かう。目の前に見えてきた倉江大橋は、景観に配慮したスレンダーなフォルム。隣の知十橋は、古い橋の老朽化に伴う架け替えで、完成したばかりの橋なのだろう。ともに今の時代に合ったシンプルなデザインが格好いい。そのほか、区間で最長635メートルの楠甫大橋や

赤崎1号橋をはじめとするダイナミックなPC橋の数々を見ながら天草下島へ。さらに南下して崎津集落へと車を走らせた。

小さな漁港に民家が建ち並ぶ静かなまちは、心地いい潮風がそよぎ、穏やかな海に包まれていた。まちの中心には「海の教会」として知られる崎津教会、そのすぐ近くの岬にはマリア像が立ち、信仰の深さを物語っている。夕暮れ時になると背後から夕陽を受けたマリア像のシルエツトが浮かび上がり、言葉で言い尽くせない感動が心を揺さぶった。

崎津集落は、世界文化遺産への推薦が決まった「長崎と天草地方の潜

伏キリシタン関連遺産」のひとつ。天草への布教は1566年、ポルトガル人宣教師のアルメイダ修道士によって始まる。信者は1万5000人以上になり、宣教師を養成するコレジオが開校。途中で立ち寄った天草コレジオ館には、天正遣欧少年使節団が持ち帰った印刷機で印刷した天草本が展示されていた。この本は、宣教師が日本の歴史を勉強するためのもので、文章はすべてポルトガル式のローマ字。『平家物語』の表紙には「日本の言葉とヒストリア(歴史)」を習い知らんと欲する人のために世話にやわらげたる平家の物語(すべてローマ字で記載)とあり、思わず笑ってしまった。

当時、天草を治めていたキリシタン大名の小西行長は、キリスト教を擁護していたが、1600年の関ヶ原の戦いで敗れて以来、農民たちは重い税と飢餓に苦しめられた。さらに1613年には禁教令が發布され、徳川家光の時代にはキリシタン弾圧は厳しさを増した。

このときの圧政に立ち上がった一揆軍が総大将に推したのが、天草四郎。病人の頭に手を置いて治したといった奇跡的なエピソードの真偽はともかく、群を抜く美貌と才知は人々を強く惹きつけたそう。

マリア像の夕陽
「天草夕陽八景」のひとつ。海に向かって佇むマリア像は、漁の安全を願って建てられたもので、地元では「海上マリア像」と呼ばれて親しまれている。

▼赤崎1号橋:6径間連結PCコンボ橋。全長232.5メートル。橋脚は張出式で高さがあり、下から見上げるとスケール感が伝わってくる。



▼楠南大橋:PC3径間連続ラーメン箱桁橋、鋼5径間連続非合成箱桁。全長635メートル。



▲「クリシタンではない」という意味合いで、天草エリアでは一年中飾られるしめ縄飾り。



▲天草エリアには、約15mもあるものから小さなものまで、天草四郎像が随所に点在する(写真は天草クリシタン館)。



▲崎津教会
空へ向かって真っすぐに伸びる尖塔の上に十字架を掲げた重厚なゴシック様式の教会は、長崎の建築家・鉄川与助によって設計。現在の教会は1934年、フランス人宣教師ハルブ神父の時代に再建された。

1637年10月、弱冠16歳の四郎を総大将として天草・島原の農民たちは「自由と平等」を求めて戦いに挑んだ。約3万7000人が原城に籠城したが、翌年2月、幕府軍約12万人の総攻撃で原城は落城。島原・天草の乱は、成立間もない江戸幕府を震撼させ、翌年から鎖国体制が続いた。天草四郎が率いた一揆軍のシンボルの陣中旗は、天草クリシタン館で見ることができた。中央に大聖杯、左右に合掌する天使が描かれた旗には、複数の血痕や弾丸の跡が生々しく残り、当時の戦いの激しさを感じさせられた。

島原・天草の乱以降、天草の暮らしは落ち着きをみせる。それでも毎年絵踏みが義務付けられ、クリシタンには厳しい弾圧が加えられた。それから約150年後の1805年、天草西海岸の4カ村において全村民の約半数がクリシタンであることが発覚。本来、クリシタンは処刑されるが、異宗を信仰した「心得違」として処刑はされなかったそう。クリスト教が解禁されたのは1873年。天草には1880年に大江

通年飾る「しめ縄飾り」の風習に 隠れクリシタンの歴史を感じる

教会、その5年後には崎津教会が建てられ、天草のクリスト教信仰は奇跡的に復活を果たした。その後何度か再建され、時代が移り変わった今でも信仰のシンボルとして、大きな存在感を放っていた。崎津教会の周辺を散策して目についたのは、家の玄関先に飾ってある「しめ縄飾り」。近くにいた地元の方に尋ねてみると「クリシタンではない」という証として一年中飾っている」「十字架の代わりに一年中飾っている」とも聞いた。これまで教科書でしか知らなかった隠れクリシタンの歴史に、初めて触れたような気がした。

▶牛深ハイヤ大橋

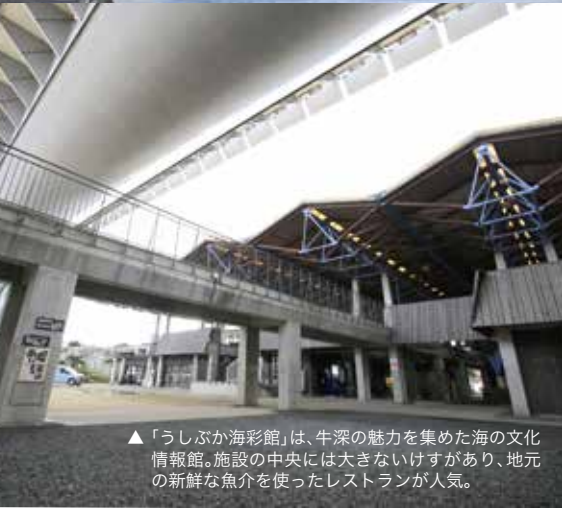
牛深市街と後浜新漁港を結ぶ優雅な曲線を描く全長883メートル、7径間連続鋼床版曲線箱桁橋。端部には風除版が設置され、橋のデザインの個性としても大きな特長となっている。夜にはライトアップされ、幻想的な雰囲気を醸し出す。



後世に残る文化的遺産として 造られた優美な牛深ハイヤ大橋

崎津エリアを散策してから、天草下島の南端に位置する牛深漁港へと足を延ばす。イタリアを代表する世界的建築家のレンゾ・ピアノ氏が設計した牛深ハイヤ大橋は、どうしても見たい橋！彼は世界中で活躍し、日本では関西国際空港旅客ターミナルビルの設計も手がけている。

なぜ、これだけ凝った橋が造られたのか疑問に思い、地元の方に聞いたところ、熊本県で実施する文化的資産を後世に残すための事業「くまもとアートポリス」の一環だと知る。牛深ハイヤ大橋は、静的で単純なイメージにこだわり、できるだけ少ない橋脚で支えられている。下から見上げてみると、緩やかにカーブを描く一本の線が、天に昇っていく龍



▲「うしぶか海彩館」は、牛深の魅力を集めた海の文化情報館。施設の中央には大きないけすがあり、地元の新鮮な魚介を使ったレストランが人気。

のように見え、今にも動き出しそうな錯覚を覚えた。

牛深市のシンボルとして橋と一緒「に造られた道の駅「うしぶか海彩館」で休憩していたら、建物がPC(プレストレストコンクリート)構造であることを発見。塩害に強く、耐久性の高いPC構造が、とても力強いものに思えた。

陶石や石材の産地である天草の 魅力を本渡エリアで多彩に堪能

2日目は天草市の中心地、本渡エリアへ。第一の目的はお気に入りの陶器を見つけることだ。

天草下島西部には陶石(天然に産出する石で、粉碎して陶磁器材料として使用できるもの)の鉱床が存在し、良質な陶石が産出されることが江戸時代から広く知られていた。天草陶石は

日本で産出される陶石の8割のシェアを誇っており、この陶石を利用した天草陶磁器は、2003年3月に伝統工芸品として国の指定を受けている。個性的な窯元が数多く点在するなか工房とギャラリーを運営する丸尾焼窯元を訪れた。

丸尾焼は、農閑期の収入を得るために瓶納屋(瓶を造る工場)として1865年に開窯した。現在は、日常の暮らしに密着した普段着感覚を大切に、生活空間を豊かにする陶器づくりにこだわっているそうだ。シンプルでモダン、その中にも土の温もりを感じさせる作品は、しつくりと手に馴染んでいく感覚がある。あれこれと悩んだ結果、ご飯茶碗を購入。旅が終わった今でも食事のたびに天草を思い出す。

さらに近くの祇園橋へと足を運ぶ。江戸時代以降に建造された石造桁橋では国内最大級、全国的にも稀な多脚



▲天草キリシタン館

国指定重要文化財の天草四郎陣中旗をはじめ、キリシタン弾圧期の踏み絵、隠れキリシタンの生活が偲ばれるマリア観音など、約200点を展示。



▲丸尾焼窯元

ガラス張りの窓から陽光が差し込む開放的な店内には、モダンでセンスのいい作品が数多く並ぶ。緑いっぱいの庭が広がり、オープンカフェのあるギャラリーは、初めてでも気軽に入れる雰囲気。



▲ 祇園橋
天草市本渡の中心から東に流れる町山口川に架かる長さ28.6メートル、幅約3.3メートルの石造桁橋。国の重要文化財に指定されている。



▲ 奴寿司
天草近海で育った天然ものを使い、ひと手間かけた斬新な寿司を提供してくれる名店。写真はトロ・コハダ。醤油をつけずとも十分味わえる。

式で、天草・島原の乱で一揆勢と幕府軍が死闘を展開した場所としても有名なのだそう。

ここ下浦町は石材業が盛んで、天草島内の神社の鳥居や石橋の多くは、下浦石工が製作している。橋の北岸側にある記念碑を見ると1832年に地元の石屋の辰右衛門によって建造されたことがわかる。国の重要文化財に指定されているが、いつでも自由に通行ができる。

橋の表面はゴツゴツしていて石と石との間には隙間がある。職人の手で造られた橋が、雨風を受けながら何百年の時を超えて今に残っていることが実感できる。橋を渡った先の祇園神社で旅の安全を祈願した後、地元の名店として有名な奴寿司で、天然地物の魚介を美味しくいただいた。

▼ 天草瀬戸大橋(ループ橋)
天草の上島と下島を結ぶループ式高架橋は、昭和49(1974)年に建造された。全長約700メートル。橋の下を船が通れるように海面の高さを確保するため、このようなループ状になった。





▲建設中の新天門橋

1号橋の北側に架かる新天門橋は全長463メートル、アーチ支間350メートル。側径間は鋼・PCの複合構造で、完成すればソリッドリブ形式のアーチ橋では国内最大の橋梁となる。(下は完成予想図)

新天門橋の完成を機にもっと便利で魅力あるまちへ

天草を存分に楽しんだ2日間。そろそろ熊本へと向かい、帰路に就く。下島と上島を繋ぐ天草瀬戸大橋を渡り、再び天草五橋を通って九州本土へ。最後に1号橋の北側に建設中の新天門橋を見学させてもらった。

冒頭で伝えたように熊本県では「90分構想」を掲げ、熊本市と天草市本渡町間を繋ぐ「熊本天草幹線道路」を計画。その一環として新天門橋が建設されている。

「今は道が国道266号線の一本しかない。通勤時や週末、観光シーズンには渋滞が発生します。島には高度医療機関がないことも大きな課題。日に何回も救急車が通りますが、橋

が完成したら助かる命が増えると思います」と現地の担当者の方は語ってくれた。

新天門橋の建設手順は、まず、両岸の鉄筋コンクリート製の基礎から橋脚を立ち上げるとともに、鋼製のアーチを海に向かって伸ばして中央で連結する。次に、車が走る部分となる橋げたを建設するのだが、海上部分はおよそ45〜50mの長さに5分割した鋼製の橋げたを船で運搬し、アーチからケーブルで吊り上げる。さらに、橋脚からPCの橋げたをやじろべえのようにバランスを取りながら左右に張り出して、海上部分の橋げたと両端の陸上部を繋いで完成する。

現場では、海上部分の橋げたが架かり、橋脚からはPCの橋げたが左右におよそ25mずつ張り出していった。新天

門橋は部材がスレンダーでしなやかなアーチを描く。50年の歴史を経て進化した橋梁技術を比較できる貴重なスポットだと感じた。

帰り際に新天門橋の絶景スポットがあると聞き、三角西港へと車を走らせた。

三角西港は、明治政府から派遣されたオランダ人の水理工師・ムルドルの設計によって築港され、1887年に開港。日本の基幹産業に貢献した熊本県随一の貿易港だという。120年以上を経た今も当時の姿を残しているのは、宮城県の野蒜港、福井県の三国港と並ぶ明治三大築港の中で三角西港のみ。756メートルにおよぶ石積埠頭と水路は2003年に国の重要文化財に指定され、一昨年7月に世界文化遺産に登録されたそう。

三角西港の石積埠頭からは、1号橋と新天門橋の姿がよく見えた。明治時代に貿易港として活用されていた最盛期は、公的機関や廻船問屋が建ち並び、大勢の人々たちが行き交う活気溢れるエリアだったそうだ。

100年以上の月日を経て、再びこれからの天草の発展の象徴的スポットになるはず。

みなさんが笑顔で暮らせる未来になってほしい。そんな想いを抱きながら旅を締めくくった。

▼三角西港

平成27(2015)年7月、九州・山口を中心とする23の資産が『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』が世界文化遺産に登録。その一つに三角西港が選ばれた。





歴史が息づく島
 天草
 旅MAP

熊本天草幹線道路 L=約70km